

茨城県笠間市

# 穴戸城跡

—市道（友）1級13号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2009

笠間市教育委員会  
ティケイトレード株式会社  
埋蔵文化財事業部

## 序

笠間市は、茨城県のほぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には愛宕山・難台山・館岸山が連なり、中央を北西部から東部にかけて涸沼川が台地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は道路改良工事に伴う遺跡の発掘調査であります。この調査の結果、尖戸城本丸に付随する土塁や堀の遺跡が確認され、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。

この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成 21 年 10 月

笠間市教育委員会教育長

飯 島 勇

## 例 言

- 1 本書は、道路改良工事に伴う宍戸城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は笠間市教育委員会の指導の下、ティケイトレード株式会社が実施した。
- 3 遺跡の所在地・調査面積・発掘調査期間・整理調査期間は、下記の通りである。

所在地	茨城県笠間市平町 137 外
調査面積	340 m <sup>2</sup> (1)
発掘調査期間	平成 21 (2009) 年 6 月 29 日～7 月 27 日、9 月 2・10 日
整理調査期間	平成 21 (2009) 年 7 月 28 日～10 月 15 日
- 4 現地調査および整理調査は、森本 崇・大角謙一が担当した。
- 5 事務局および調査指導は下記の通りである。

事務局	笠間市教育委員会生涯学習課
調査指導	茨城県埋蔵文化財指導員 川崎純徳
	笠間市文化財保護審議委員 能島清光
- 6 調査によって得られた資料は、笠間市教育委員会が保管・管理している。
- 7 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記してここに感謝を申し上げます。(敬称略・順不同)

川崎純徳	能島清光	幾浦忠男	茨城県教育府文化課	笠間市教育委員会生涯学習課
------	------	------	-----------	---------------
- 8 本書における遺物觀察は、下記の方々にご指導を賜った。

鈴木裕子	(株式会社四門)	村山 卓	(立正大学大学院生)	山中敏彦
------	----------	------	------------	------
- 9 発掘調査の参加者は、下記の通りである。(敬称略・五十音順)

青木 誠	大山年明	仲田 仙	横田忠利
------	------	------	------
- 10 整理作業の参加者は、下記の通りである。(敬称略・五十音順)

阿部正男	安藤節子	池口泰弘	海野浩幸	下田陽子	永田真弓	長谷川貴司
半本 亘						

## 凡 例

- 1 本書に用いた略号は、SA：土墨 SD：溝（堀）跡である。
- 2 本書に使用した基本的な挿図の縮尺は下記の通りであり、これ以外については挿図中に明示した。

遺構：	断面図 1:20、1:40、1:80	平面図 1:80、1:150、1:200、1:400
遺物：	上器・陶磁器・瓦 1:2、1:3、1:4	木製品 1:12
- 3 平面図のトーンは、搅乱範囲を示す。
- 4 全側図に用いた土墨・堀跡の想定線は、宍戸城想定図を元に作成した。
- 5 出土遺物觀察表中の計測値は、<>が復元値、( ) が残存値を示す。
- 6 揭載した遺物には、遺物毎に番号を付しており、本文・挿図・表とともに一致している。
- 7 土層觀察と遺物の色調は、『新版 標準土色帖』(監修 農林水産省農林水産技術会議事務局ほか)を使用した。

## 目 次

### 例言 凡例

### 目次

第1章 調査の経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の経過と方法 .....	1
第2章 位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	4
第3章 遺跡の概要と基本層序 .....	6
第1節 遺跡の概要 .....	6
第2節 基本層序 .....	7
第4章 検出した遺構と遺物.....	10
第1節 調査区 A区.....	10
第2節 調査区 B区.....	13
第3節 調査区 C区.....	18
第4節 現存する土壙 (C-5区、SA01).....	21
第5章 総括 .....	22
引用・参考文献 .....	24
写真図版	
抄録	

## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡と調査地点 .....	3
第3図 基本層序採取地点図.....	7
第5図 調査区全測図 .....	8・9
第7図 A区西側壁面断面図.....	11
第9図 A区出土遺物 .....	12
第11図 B区東側壁面断面図.....	14
第13図 B区西側壁面断面図.....	14
第15図 B区北側壁面断面図 (東側) .....	15
第17図 B区トレンチ③西壁断面図 .....	16
第19図 B区杭No.1~4 断面図 .....	16
第21図 C区平面図 .....	18
第23図 C-3区西側壁面断面図 .....	19
第2図 宍戸城想定図と調査区位置図 .....	5
第4図 宍戸城跡基本層序 .....	7
第6図 A区平面図・北側壁面断面図 .....	10
第8図 A区東側壁面断面図 .....	11
第10図 B区平面図 .....	14
第12図 B区南側壁面断面図 .....	14
第14図 B区北側壁面断面図 (西側) .....	15
第16図 B区トレンチ②西壁断面図 .....	15
第18図 B区トレンチ④西壁断面図 .....	16
第20図 B区出土遺物 .....	17
第22図 C-1区東側壁面断面図 .....	19
第24図 C-3区東側壁面断面図 .....	19

第 25 図 C-3 区南側壁面断面図	20	第 26 図 C 区出土遺物	20
第 27 図 C-5 区北側壁面断面図	21	第 28 図 C-5 区東側壁面断面図	21
第 29 図 宍戸城下鉢図	23		

## 表目次

表 1 宍戸城遺跡周辺の中・近世遺跡一覧	3	表 2 A 区出土遺物観察表	13
表 3 B 区出土遺物観察表	18	表 4 C 区出土遺物観察表	20
表 5 出土遺物集計表	23		

## 写真図版目次

図版 1 A 区 全景（東から）	A 区北側壁面
A 区東側壁面	A 区西側壁面
B 区 全景（西から）	B 区北側壁面（西側）
B 区北側壁面（東側）	B 区東側壁面
図版 2 B 区南側壁面	B 区西側壁面
B 区トレンチ①発検出状況（西から）	B 区木杭 No.1 ~ 4 検出状況（南から）
B 区トレンチ②西側壁面（南部）	B 区トレンチ②西側壁面（北部）
B 区トレンチ③西側壁面（中央部）	B 区トレンチ③西側壁面（北部）
図版 3 C-1 区東側壁面	C-3 区 全景（西から）
C-3 区東側壁面	C-3 区南側壁面
C-3 区南側壁面 遺物出土状況（北から）	C-3 区西側壁面
C-3 区西側壁面（南側深掘り）	C-3 区堀底プラン確認（西側壁面）
図版 4 C-3 区堀底プラン確認（東側壁面）	C-5 区北側壁面
C-5 区東側壁面	土壙 遠景（西から）
土壙 現状風景 1（南から）	土壙 現状風景 2（北から）
土壙 現状風景 3（西から）	土壙 現状風景 4（北から）
図版 5 宍戸城跡出土遺物	

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成18（2006）年7月7日、笠間市役所都市建設部道路整備課は、笠間市教育委員会教育長に対して、笠間市平野町地内において計画されている市道改良工事における埋蔵文化財の所在の有無と、その取り扱いについて照会した。これを受け、笠間市教育委員会は、水戸教育事務所の茨城県埋蔵文化財指導員である川崎純徳氏に調査を依頼し、平成20（2008）年3月4・5日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、掘削深度の深さより壠跡および盛上整地面を確認し、笠間市教育委員会は笠間市役所都市建設部道路整備課あてに、事業地内に遺跡が所在する旨を回答した。

笠間市役所都市建設部道路整備課は、茨城県教育委員会教育長に対し、平成20（2008）年9月25日付けで宍戸城跡について、文化財保護法94条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と判断し、平成20（2008）年11月11日付けで工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会はティケイトレード株式会社に調査を依頼した。承諾後、笠間市教育委員会・笠間市役所都市建設部道路整備課・ティケイトレード株式会社は三者協議を行ない、試掘調査の結果に基づき、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳、笠間市文化財保護審議委員の能島清光を指導委員として平成21（2009）年6月29日～同年7月27日、9月2・10日にかけて本調査を実施した。

### 第2節 調査の経過と方法

発掘調査は、平成21（2009）年6月29日～同年7月27日、9月2日・10日に実施した。本調査目的は道路拡張工事に伴う発掘調査であり、生活道を残すために調査区は分断して設定する。調査区は西よりA区・B区・C区と設定した。その際に崩落の危険性を考慮し、道路側から1m離れた位置に各調査区を設定する。本調査地点は試掘段階から湧水が確認されており、水中ポンプを随時稼動して調査を行なった。遺構記録はS=1/20の縮尺を基本に断面図を手作業で作成し、湧水の影響により、崩落の可能性の高い場所に関しては写真測量で記録した。平面図の作成は、トータルステーションを用いて行なった。写真撮影は、35mmのモノクロフィルム・カラーリバーサルフィルムとデジタルカメラを用いて行なった。

6月29日、重機を用いてA区の表土層を開始する。基本土層の観察を行なうため、深掘りトレッチを設定して土層堆積状況の把握に努めた。自然堆積層は深度1.60mより確認できた。硬化面を調査対象面と定めて、表土掘削範囲を広げる。その後、遺構確認を行なうも平面で遺構は確認されず、壁面より土塁の土層が検出される。A区の掘削が終了し、6月30日、茨城県教育厅文化課の視察を受ける。7月1日、高所作業車を用いて全景撮影を実施、笠間市

教育委員会・指導委員の観察を受ける。

7月3日、重機を用いてB区の表土掘削を開始する。A区と同様に調査区に2ヶ所の基本土層トレンチを設定する。壁面より上墨の上層を確認する。7月8日、茨城県教育庁文化課・笠間市教育委員会・指導委員の観察を受ける。土墨が堀へと落込む状況や堀の埋め立てられた状況を観察するため、4ヶ所のトレンチを設定する。7月11日、高所作業車を用いて全景撮影を実施する。

7月15日、堀底の確定を行なうため、トレンチ①に深掘地を設定して調査を開始したもの、住宅による搅乱を受けた場所により、西側壁面の崩落が著しく、深掘調査を断念せざるを得なかった。その後、C区の表土掘削を開始する。C区では大量の注射針やコンクリート塊などの廃棄物が深度1.20～1.40mまで廃棄されており、廃棄物の多さと湧水を要因とし、土壤が緩み、崩落を引き起こしていた。このような状況を笠間市教育委員会・指導委員および笠間市道路整備課に視察してもらい、掘削方法を協議した。結果、C区は状況の把握を目的に調査区を4ヶ所設定する事にした。これらのトレンチは東からC-1区、C-2区、C-4区、C-3区とした。そして、C-1区・C-2区は壁面の崩落を考慮して調査当日に埋め戻す事にした。表土掘削に際しては、深度1.20～1.70m以上現代の廃棄物で埋まっている状況を確認した。このような状況でC-1区およびC-3区の壁面からそれぞれ掘の両端部を検出する。7月17日、笠間市教育委員会・指導委員の観察を受け、堀の規模を確認する事を目的に、壁面の崩落に留意して掘削作業を行なった。7月21日、現存する土壌の地形測量を行なう。7月27日、調査器材を撤収、発掘調査を一旦終了する。

7月28日、整理調査に着手する。

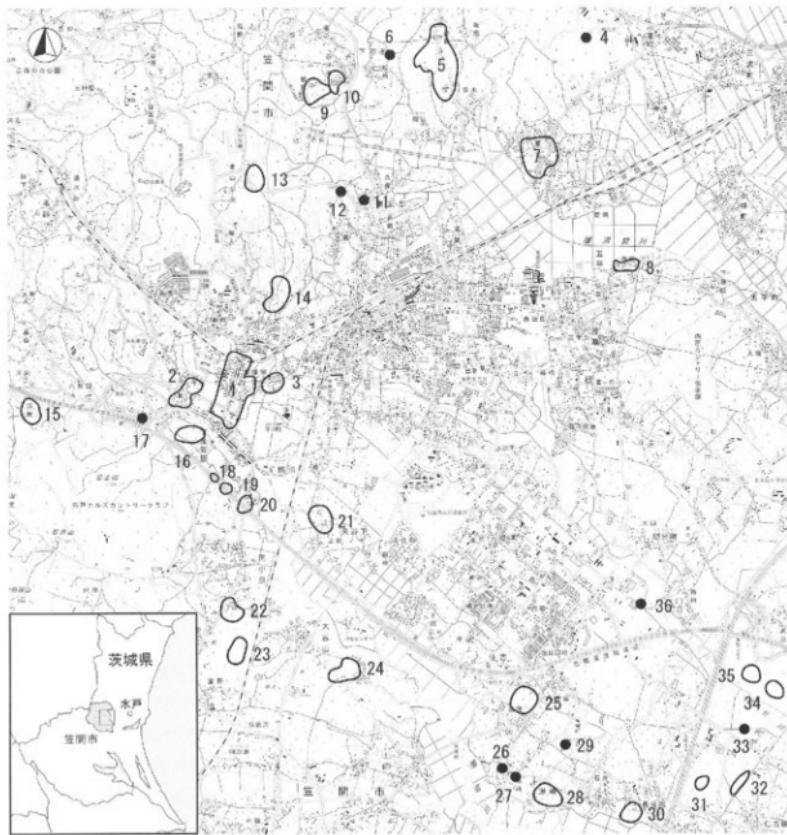
9月2日、茨城県教育庁文化課・笠間市教育委員会・指導委員・笠間市道路整備課の監督の下、新たに調査区（C-5区）を設定し、調査を実施する。その後、当日中に埋め戻す。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

遺跡の所在する笠間市は、茨城県のはば中央部に位置し、北部が栃木県、西部は桜川市、東部が水戸市や茨城町、南部が石岡市や小美玉市に隣接している。その笠間市は平成18(2006)年3月より笠間市・友部町・岩間町の1市2町が合併する事で総面積240.27km<sup>2</sup>の新たな市として誕生した。

宍戸城跡は茨城県笠間市平町（旧西茨城郡友部町大字平町）に位置する。その周辺は東北部が八溝山地の一端である鶏足山塊に属しており、標高100～200mの山内山・和尚塚・十文字山など友部丘陵と呼称される山地が連なっている。また、南東部には旧友部町域の大部分を占める標高30～40mの東茨城台地が、涸沼川に沿って大洗方面にまで広がる。中央部を東流する涸沼川は国見山付近に水源を持ち、枝折川や涸沼前川と合流しながら涸沼へと注いでいる。



第1図 周辺の遺跡と調査地点

表1 穴戸城遺跡周辺の中・近世遺跡一覧

番号	遺跡名	主な遺物と時代
1	穴戸城跡	城跡(中世・近世)、町字定め跡
2	石芦川跡(法華堂跡)	城跡(中世)
3	古墳	古墳(中世)
4	大日山古墳	古墳(中世)
5	寺社、山城施設	内丘(盛岡生)・古墳
6	西の八塚	築山(土塁)・古墳
7	小山城跡	城跡(中世)
8	三五寺古墳群	古墳(中世)
9	吉田城跡	城跡(中世)
10	御成園跡	庭園(中世)
11	舟橋取方跡	遺(近世)
12	大久保城	城跡(中世)
13	北の遺跡	遺(近世)
14	北金子前遺跡	中世施設・古墳
15	上河原田遺跡	遺跡(中世)
16	下河原田遺跡	遺跡(中世)
17	高上山古墳群	古墳(中世)
18	他の土塁跡	遺(近世)

番号	遺跡名	主な遺物と時代
19	吉平八幡社	遺跡、遺構跡(中世)
20	吉平城跡	城跡(中世・近世)
21	上野城跡	城跡(中世)、吉平城跡(後世)
22	東小金城跡	小糸氏城跡(歴史)
23	西豊良城跡	小糸氏城跡(歴史)
24	大内古墳	小糸氏古墳(中世)
25	古有賀城	城跡(中世)
26	吉田城跡	城跡(中世)
27	千曲城	城跡(中世)
28	酒泉城跡	城跡(中世)、伊賀道遺跡
29	御城	城跡(近世)
30	足見跡城跡	城跡(近世)
31	佐保城跡	城跡(近世)、土塁・溝(近世)
32	五万所古墳	古墳(古墳)・古墳跡(近世)
33	御岸跡	城(近世)・古跡
34	伊丸老城	御城跡(古墳)・城(近世)
35	御座城跡	城跡(近世)
36	東云御跡跡	劉邦跡(古跡・近世)

これらの河川や山々に囲まれる調査地は、JR水戸線宍戸駅より南方へ約500m、標高26～27mの沖積低地上に立地している。現在は豊かな水田地帯である。

## 第2節 歴史的環境

本遺跡周辺の旧石器～古代にかけての詳細な記載は茨城県教育財団文化財調査報告書第256集『新善光寺・宍戸城』にあるので、そちらを参考にしていただきたい。ここでは中世～近世の状況を中心に概観していく。

旧友部町における人々の生活痕跡は、約15,000年前の旧石器時代から縄文時代にまたがる石山神遺跡に遡る。縄文時代は涸沼川と涸沼前川に挟まれた標高35～40mの台地上に生活の場があり、その周辺部一帯に広く縄文土器の散布地が確認される。その分布状況からは縄文時代中期に最盛期をむかえ、後・晩期は人口の減少をうかがえる。

弥生時代の遺跡は、平成11(1999)年以降の久保塚群、向原遺跡や塙谷遺跡などの発掘調査から堅穴住居跡が確認される。これまで当該期は希薄な地域と認識されていたが、近年の調査成果より大規模な集落の存在が知られるようになる。遺跡の分布状況は涸沼前川流域に形成された丘陵地、その発達した小支谷縁辺部に集中する。その分布状況からは弥生時代後期の土台式土器が最も多く見られる。

古墳時代では、集落が台地上の周辺部に、古墳は台地のやや奥まった地域に認められるようになる。古墳の変遷から豪族に支配された時代から中央集權国家の勢力が徐々に浸透し、常陸国が成立し、那珂・茨城郡の成立と変化をたどる事になる。旧友部町はその両郡の支配下に置かれていたと考えられる。

そして、中世に至る前段階の平安時代末期、沼川流域一帯には九条家領莊園小鶴荘が成立している。この所領を寄進したのは平直幹と推定され、国内諸郡は桓武系常陸平氏が支配権を掌握していた。その後に源氏が政権を握ると、常陸國守護として八田知家の拠点となつた。知家の四男四郎左衛門尉家政が宍戸氏の始祖となり、この地は宍戸荘<sup>※</sup>と呼称されるようになる。よって、この宍戸荘は少なくとも14世紀には成立していたと考えられる。宍戸氏の居館は、宇の古館とする説や宍戸氏の菩提寺のある新善光寺とする説などがあるが明確にはされていない。

戦国時代の宍戸氏は筑波48館の旗頭となり、67,000石を領する。15代義利の時に天正18(1590)年の小田原の役に際して豊臣秀吉と謁見し、旧領61,000石を安堵される。その後、16代義處の時に佐竹氏と常陸統一を争うもこれに敗れ、宍戸氏は佐竹氏の麾下に属していくようになる。文禄4(1595)年、佐竹氏の命令により四郎義長は6,730石の真壁郡海老ヶ島城(現筑西市)へと移封させられ、宍戸の地は佐竹氏の直轄地となる。

慶長7(1602)年、佐竹氏の代わりに秋田実李が50,000石で移封され、『宍戸城下絵図』に見られる近世城郭として整備される。正保2(1645)年に秋田氏が福島県三春へと国替えとなつた際に廢城となる。この地は幕府の直轄領となり、その城域の大部分が水田地帯へと姿を変えていく。天保2(1682)年になると、徳川光圀の弟の松平頼雄が10,000石で宍戸藩を



第2図 宍戸城想定図と調査区位置図 (『茨城県教育財団文化財調査報告書第256集』をもとに作成)

立藩し、以後明治維新まで松平氏がこの地を支配することになる。松平氏は宍戸城の主郭を利<sup>用</sup>して陣屋を築くも、城として本格的に機能するような築城はしていないと考えられる。

\*初見、上市原如意輪寺所蔵の嘉慶3（1328）年に刻まれた銘文「常州完（穴）戸庄市原西方如意輪寺」『友部町史』参考

## 第3章 遺跡の概要と基本層序

### 第1節 遺跡の概要

宍戸城は山地と河川に囲まれ、小規模な盆地の中で微高地に立地する平城である。現在は宅地や水田が一帯を占めている。この宍戸城周辺には、佐竹・江戸氏に対抗するため、南東方向に湯崎城・住吉城・長尾城、北方向に市原城・御城遺跡の城郭が配置されている。また、北東方向に里見氏の居城とする小原城や、東南方向に横田氏の長峰城跡と推定される上郷遺跡が築かれている。城域範囲は約1,280,000m<sup>2</sup>であったと想定され、明治22（1889）年の水戸線と国道355号線の開通以降は城跡の中心部は宅地化されていった。

築城者は城名を冠するように、中世においてこの地を支配していた宍戸氏に遡ると考えられている。しかし、その実態は不明確なもので、現在残存する部分は、秋田実季が近世城郭として整備したものと考えられる。城は現在旧陣屋と呼ばれる台地に本丸を設定し、本丸を守備するため、三重の土塁と堀を環郭式に巡らす構造となっている。当時の様相は正保年間に描かれた『宍戸城下絵図』（第28図）から知ることができ、現存している遺構は北側と南側の一部分で本丸の土塁が見られる。現在は北側の土塁上に末広稻荷が鎮座している。南側の土塁が今回の測量調査を実施した場所である。

これまで宍戸城跡の調査は、武家屋敷を中心にして三度にわたって調査が行なわれている。

2004年度の調査では中世末～江戸初期の掘立柱建物跡が17棟確認され、その建物跡に伴う池跡・井戸跡や門跡も付随して検出されている。構造は堀と溝によって区画された武家屋敷群と認識され、宍戸城が中世に遡る可能性を指摘している。また、遺物は内耳土器や土鍋の土師質土器、火鉢や擂鉢の瓦質土器、貿易・国内陶磁器類が豊富に出土し、その多くは池跡に廃棄されている。

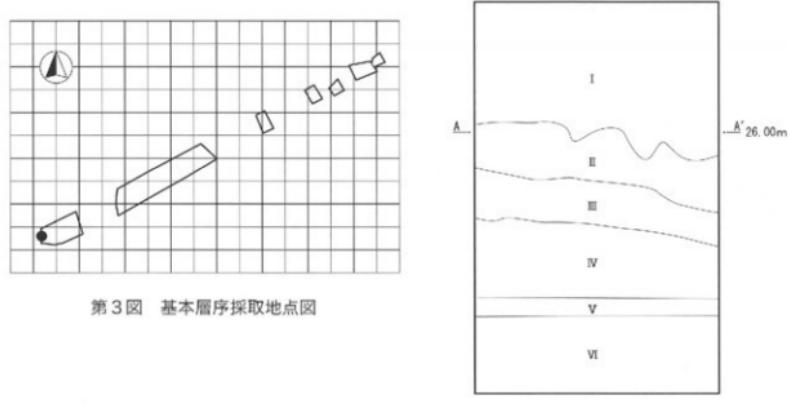
2006年度の調査では2004年の調査と同様に掘立柱建物跡3棟、溝や井戸跡などが検出される。そのうち、200石の「坂田権之助」邸と比定された屋敷跡からは、石組井戸がみられる。遺物は土師質土器や瓦質土器が多くの中を占め、貿易・国内陶磁器類も出土している。

2008年度の調査では調査区が三の土塁に対して平行で、三の堀に交差する形に設定されている。この場所が宍戸城の構造に直接関係する初めての発掘調査となっており、堀跡内からは土師質土器や陶磁器が出土している。この堀は2度ほど埋め戻され、その間の層に植物遺体を意図的に敷いたと考えられる。この工法は周辺一帯を水田に利用するために、地盤強化を目的にした粗粒工法と類似していると指摘している。

## 第2節 基本層序

基本層序は本調査のA区西側壁面の深掘りトレンチを対象に堆積状況の確認を行なった。I層は表土（擾乱）、II～IV層までが土壌を構築する盛土である。II層は浅黄色の砂層を主体にした土層である。

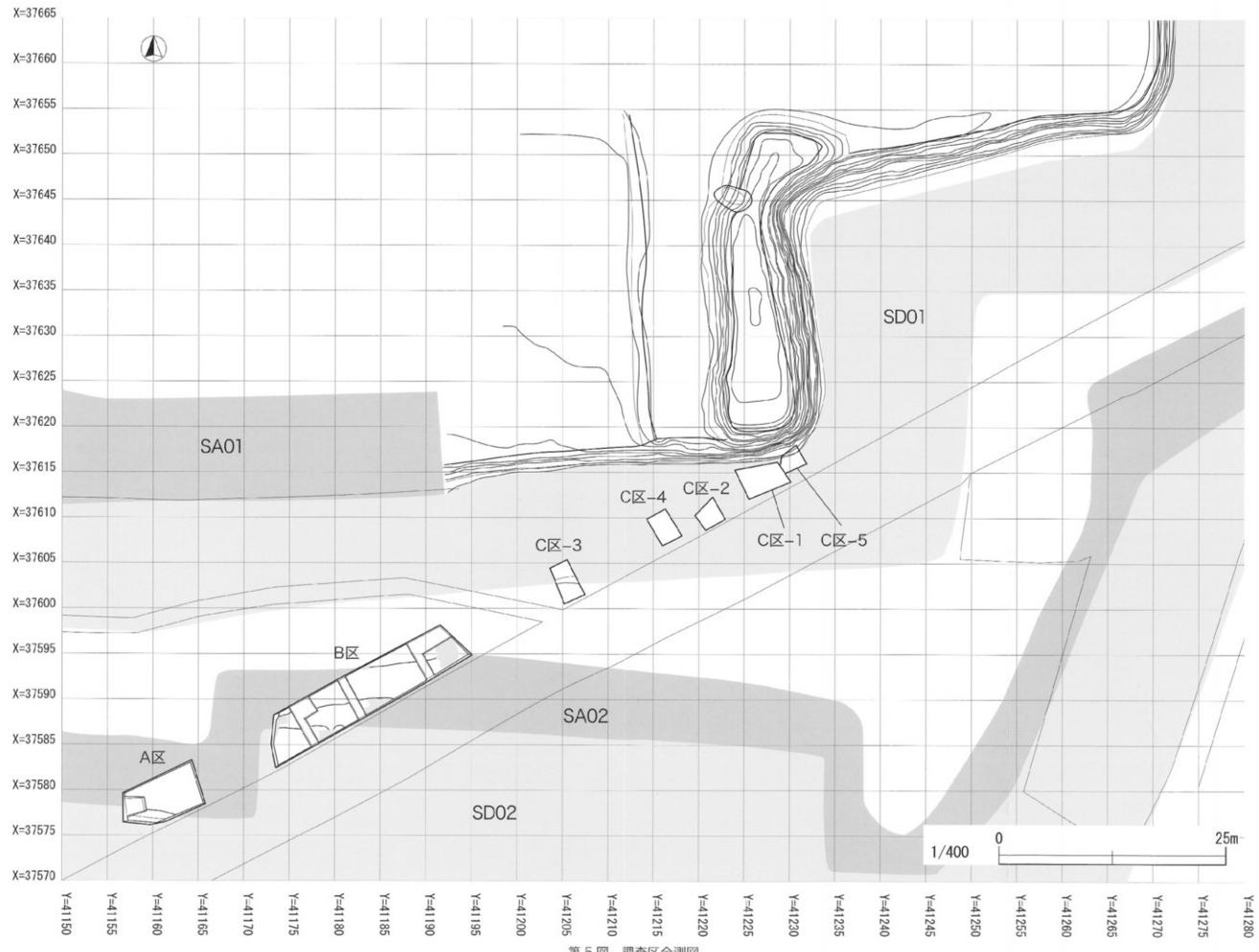
IV層は多量に黒色粘土ブロックを含み、調査区全域に広がりをみせるため、IV層の上面を調査対象面と設定して調査を行なう。また、この層が土壌の基盤面であり、その内部に細片化した土師質土器が多数混入している。V層はIV層とVI層の間の層であり、黒色粘土ブロックと浅黄色砂の入り混じるという特徴を有している。そして、VI層以下が自然堆積層である。



第3図 基本層序採取地点図

I 表土（擾乱）			
II 浅黄色砂	5Y7/4	締まりやや強い / 粘性やや強い	黒色粘土ブロック中量、灰色土少量を含む
III 灰色土	7.5Y2/1	締まり強い / 粘性強い	黒色粘土ブロック少量、砂粒少量を含む
IV 灰色土 少量を含む	7.5Y2/1	締まり強い / 粘性強い	調査対象面。黒色粘土ブロック多量、砂利
V 浅黄色砂	5Y7/4	締まりやや強い / 粘性やや強い	灰色土少量を含む
VI 浅黄色砂	5Y7/4	締まりやや強い / 粘性やや強い	自然堆積層

第4図 宍戸城跡基本層序



第5図 調査区全測図

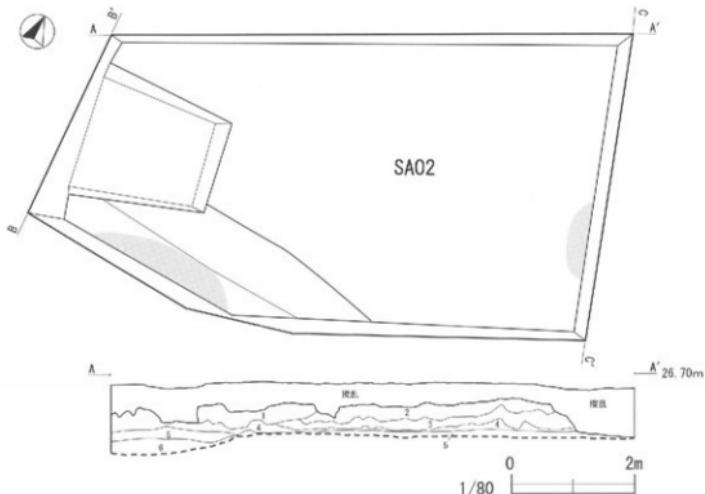
## 第4章 検出した遺構と遺物

調査範囲内で検出される遺構を『宍戸城下絵図』と比較し、どの程度の整合性がみられるのか参考にしながら、調査を進めた。本報告内で用いる遺構の呼称は、現存する本丸の土塁（一の土塁）を SA01、一の堀を SD01、A区・B区より確認された二の土塁を SA02、二の堀を SD02と示す。

### 第1節 調査区 A区

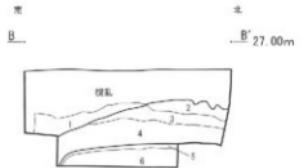
深掘りトレンチからの断面観察の情報により、黒色粘土ブロックを多量に含む硬化面を調査対象面と設定し、遺構確認を行なった。北側壁面（A断面）および西側壁面（B断面）より上塁の断面（SA02）が確認できた。また、調査区南側に向かう傾斜面も確認でき、この傾斜面が堀（SD02）へと向かう落込みと推定される。この傾斜は調査区外へと広がっており、規模や平面形は不明である。

調査対象面（第5図6層）は、調査区一帯に広がりをみせている。調査対象面より下層は砂が堆積しており、この硬化面が土塁の基盤であると言える。また、調査対象面の土層からは細片化した土師質土器が数多く出土しており、土塁の構築時に土師質土器が混入した土を意図的



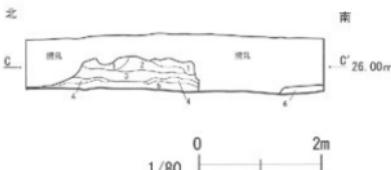
1 黒色粘土	7.5Y2/1	弱まり強い / 粘性強い	強化鉄少量、浅黄色砂ブロック少量、砂利少量含む
2 浅黄色砂	5Y7/4	弱まりやや強い / 粘性やや強い	強化鉄中量、灰白色少量含む
3 黒色粘土	7.5Y2/1	弱まり強い / 粘性強い	強化鉄少量、浅黄色砂ブロック少量含む
4 浅黄色砂	5Y7/4	弱まりやや強い / 粘性やや強い	強化鉄中量、黑色粘土ブロック中量含む
5 灰色土	10Y4/1	弱まりやや強い / 粘性やや強い	黑色粘土ブロック少量、砂利少量含む
6 灰色土	10Y4/1	弱まり強い / 粘性強い	黑色粘土ブロック多量、砂利少量、土器微量含む

第6図 A区平面図・北側壁面断面図



1 オリーブ褐色土	5Y3/1	緑よりやや強い / 粘性やや強い	黒色粘土上ブロック少層、薄層少含む
2 浅灰色砂	5Y7/4	緑よりやや弱い / 粘性やや強い	黒色粘土ブロック中層、黑色上少量含む
3 黄褐色土	5Y7/4	緑より弱い / 粘性弱い	黒色粘土ブロック少層、砂粒少量 合む
4 灰色土	7.5Y7/2	緑より強い / 粘性強い	黒色粘土ブロック多層、砂利少量含む
5 淡黄色砂	5Y7/4	緑よりやや弱い / 粘性やや強い	灰色土少量含む
6 淡黄色砂	5Y7/4	緑よりやや弱い / 粘性やや強い	

第7図 A区西側壁面断面図



1 淡黄色砂	5Y7/4	緑よりやや弱い / 粘性やや強い	酸化鉄中層、黒色粘土上ブロック中層、砂粒少量含む
2 黑色土	10Y4/1	緑よりやや弱い / 粘性やや強い	酸化鉄少量、淡黄色砂ブロック少量含む
3 黑色土	10Y4/1	緑よりやや弱い / 粘性やや強い	酸化鉄中層、砂粒少量含む
4 淡黄色砂	5Y7/4	緑よりやや弱い / 粘性やや強い	酸化鉄中層、黑色粘土ブロック中層含む
5 黑色土	10Y4/1	緑よりやや弱い / 粘性やや強い	酸化鉄中層、黑色粘土ブロック少層、砂粒少量含む
6 黑色土	10Y4/1	緑より強い / 粘性強い	黑色粘土上ブロック多層、砂粒少量含む

第8図 A区東側壁面断面図

に用いる理由が見当たらないために、細片の土師質土器が廃棄されていた場所より運ばれたものと推察する。

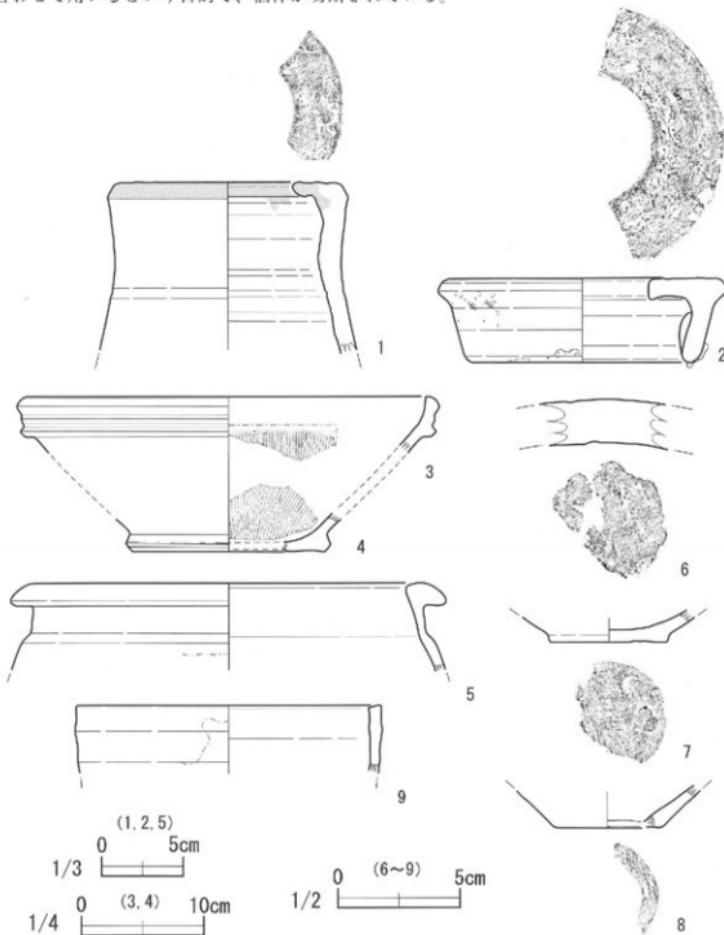
壁面の様相から SA02 の構造をみると、土壙の基盤には締まりの強い黒色粘土ブロックを混入させて頑丈な基盤を築いている。その上面に浅黄色砂と黒色粘土の土層を各々約 20 ~ 25cm の厚さで交互に盛っている。したがって、容易に崩落させないように土壙自体を強固にする版築土壙を意識していると考えられる。しかし、断面の状態は各層を丁寧に仕上げておらず、叩き棒などの調整具を用いた可能性は低い。このため、版築を意識するも版築そのものではないと認識して、ここでは「版築状」と表現する。

SA02 の規模は北側壁面（A断面）と西側壁面（B断面）より、硬化面の下面より高さが約 90cm 以上、幅が約 1.4 m 以上あったと考えられる。

出土遺物状況（第9-1～9図、写真図版5-1～9図）

A区では95点の遺物が出土し、本調査での出土遺物の74%を占める。このうち、9点を掲載する。

1・2は、窯道具で焼台に分類する桔梗台である。本調査より出土したものは、胴部の長い型（1）と短い型（2）の2種類がみられる。長い型は割れ口に釉が垂れているので、破損しても繰り返し利用されたと考えられる。また、短い型は大型陶器を窯入れする際にその大きさに合わせて用いるという目的で、個体が切断されている。



第9図 A区出土遺物

3・4・5は、製作時期が19世紀以降と考えられる笠間焼である。3・4は同一個体ではないが、遺物の様相を把握するために実測図上で復元し、掲載する。

6は中世瓦であり、凸面と凹面の両面にナデ整形が施されている。7・8は土師質上器のカワラケであり、製作時期が中世後期と考えられる。9は香炉と考えられる陶器の破片資料である。

表2 A区出土遺物観察表

件号	調査区	出土位置	埋没	断面	口径 (cm)	高さ (cm)	透視 (cm)	納土・隙間	色調	焼成	手法・特徴	重量 (kg)	備考
1	A区	表土一帯	灰路	柱桟台	<140>	103	—	—	灰青褐色	良好	クロコ成形、上面に白色等が付着	(161.0)	実測具
2	A区	表土一帯	灰路	柱桟台	<160>	60	<134>	—	暗褐色	良好	クロコ成形、上面に白色等が付着、上面に點状付着	(173.0)	実測具
3	A区	表土一帯	青苔	塙	330	40	—	灰釉	暗褐色	良好	墨書き、墨書き12角	(96.2)	空頭罐
4	A区	表土一帯	青苔	塙	27	—	<153>	灰釉	暗褐色	良好	墨書き11角	(96.2)	空頭罐
5	A区	表土一帯	灰路	塙	<240>	53	—	灰釉	暗褐色	良好	クロコ成形	(87.2)	供門施
6	A区	調査対象面	瓦	平瓦	—	—	—	石灰・雲母・白色斑	灰青	良好	内面ナゲ、画面ナゲ	(82.7)	中世瓦
7	A区	調査対象面	土師質上器	カワラケ	10	18	石灰・良石	黄褐色	良好	クロコ成形、裏面系切痕	(21.8)	中世後期	
8	A区	調査対象面	土師質上器	カワラケ	16	440	—	石灰・良石	にびい黄褐色	良好	クロコ成形、裏面系切痕	(9.9)	中世後期
9	A区	調査対象面	陶器	香炉	<120>	20	—	灰釉	淡褐色	良好	クロコ成形	(5.6)	

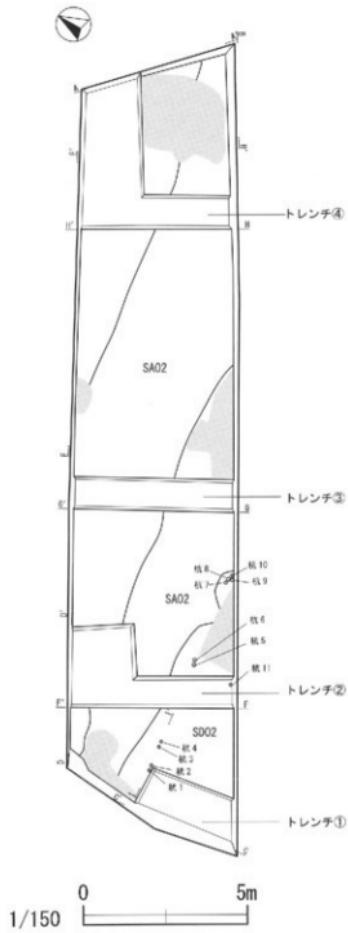
## 第2節 調査区 B区

B区は、A区と同様に黒色粘土ブロックの硬化面を調査対象面とし、土壌1本と堀跡1条が検出された。なお、調査区北側壁面の土層観察により版築状の盛土層を確認した。

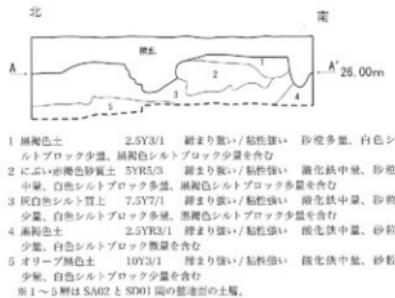
北側壁面の西側と東側では盛土層の様相が異なる。北側壁面の盛土層が、A区の土壌と連続しているか確認するため、西側壁面の状況把握に努めたが、攪乱の影響を受けており、土壌の方向を確認するに至らなかった。北側壁面（西側）の状況は、A区と同様に黒色粘土ブロックの硬化面が盛土層の基底部に見られ、その上面には高さ15～25cmで版築状に盛土している。この盛土層も、その構造から土壌とみてよいと思われる。

一方、北側壁面（東側）（E断面）の状況は、上面に粗砂が30～60cmの厚さで2層堆積しており、その下層に灰白色シルト質土と黒褐色シルト質土を版築状に盛土している。この粗砂はトレチ④西側壁面（H断面）の6層からも検出されているため、近代以降の開発に伴って入り込んだ砂ではないと考えられる。そして、平面の区画状況および北側壁面（西側）との構築層の様相が異なる事から、調査区東側はSA02とSD01間の整地面（通路）であると考えられる。

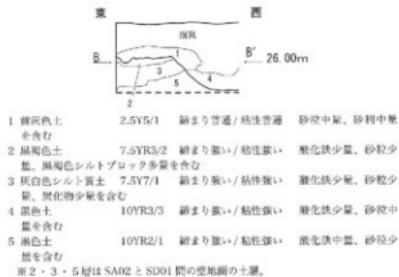
西側壁面（D断面）は堀底部に拳大の円礫が敷き詰められており、その上面には平成20(2008)年調査の堀跡から確認された植物遺体堆積層と同様の層を確認する。したがって、この場所はSD02に相当すると推定され、この堀は植物遺体堆積層の直上まで後世の搅乱を受けていた。また、西側壁面（D断面2層）とトレチ②（F断面9層）より黒褐色土層は緩やかな傾斜角度をもち、堀の傾斜面となる可能性がある。トレチ②～③の西側壁面の土層（F・G断面）観察から、堀は少なくとも2回に亘って埋戻しが行なわれているであろう。



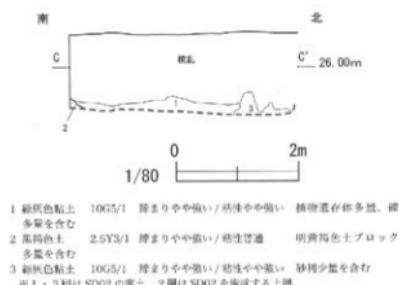
第 10 図 B 区平面図



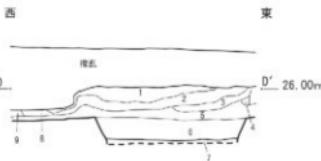
第 11 図 B 区東側壁面断面図



第 12 図 B 区南側壁面断面図



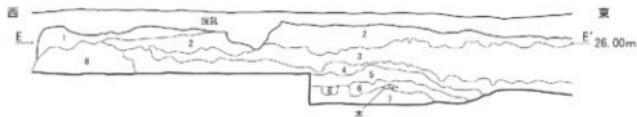
第 13 図 B 区西側壁面断面図



1 黒色土	7.5Y2/1	緑まりやや強い/粘性やや強い	黒色粘土ブロック少量を含む
2 黄褐色土	GY7/8	緑まりやや強い/粘性やや強い	黄褐色土ブロック少量、黄褐色粘土少量を含む
3 黑褐色土	10YR3/1	緑まりやや強い/粘性やや強い	黒褐色土ブロック 中量、黄褐色粘土ブロック少量、炭化物少量を含む
4 黄褐色土	5Y7/8	緑まりやや強い/粘性やや弱い	黄褐色土ブロック少量を含む
5 黑褐色土	10Y3/1	緑まりやや強い/粘性やや弱い	黒褐色土ブロック少量、綠少量、炭化物少量を含む
6 黄褐色土	GY7/8	緑まりやや強い/粘性やや弱い	黒褐色土ブロック少量、綠少量を含む
7 黄褐色質土	2.5Y7/8	緑まりやや強い/粘性強い	黒褐色土ブロック少量を含む
8 黑褐色土	10YR3/1	緑まりやや強い/粘性やや強い	黒褐色土ブロック少量を含む
9 黄褐色砂	GY7/8	緑まりやや強い/粘性やや弱い	黄褐色粘土ブロック中量、黃褐色質土少量を含む

※ 1～9層は SA02 を構成する上層。

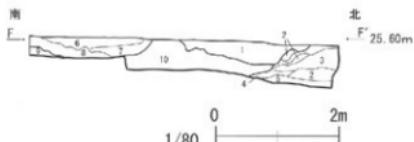
第14図 B区北側壁面断面図（西側）



1 貫灰色砂	2.5Y4/1	緑まりやや強い/粘性質強	
2 灰白色砂	7.5Y7/2	緑まりやや強い/粘性質強	
3 黑褐色シルト質土	10Y5/1	緑まりやや強い/粘性やや弱い	鈍化鉄中量、砂粒少量を含む
4 黑褐色シルト質土	10Y3/1	緑まりやや強い/粘性やや弱い	鈍化鉄中量、从白色シルトブロック少量を含む
5 黑褐色シルト質土	7.5Y7/2	緑まりやや強い/粘性やや弱い	鈍化鉄中量、从白色シルトブロック少量を含む
6 鞍部灰褐色シルト	5G5/1	緑まりやや強い/粘性やや弱い	鈍化鉄中量、灰褐色シルトブロック少量を含む
7 鞍部灰褐色シルト	5BG3/1	緑まりやや強い/粘性やや弱い	植物遺体少量、鈍化鉄少量を含む
8 黑褐色土	10YR3/1	緑まり強い/粘性やや弱い	鈍化鉄多量、砂粒少量を含む

※ 1～8層は SA02 と SD01 間の堆積層の上層。

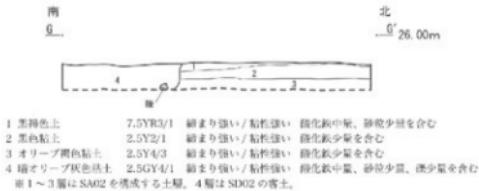
第15図 B区北側壁面断面図（東側）



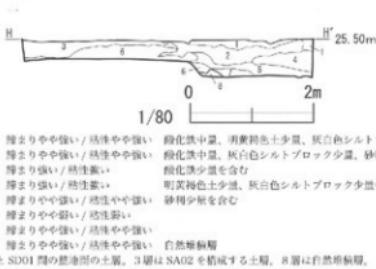
1 稲オリーブ灰褐色土	2.5GY4/1	緑まりやや強い/粘性強い	砂利少量、砂少量を含む
2 黄褐色土	2.5Y7/8	緑まりやや弱い/粘性強い	黒褐色粘土ブロック少量を含む
3 黑褐色土	7.5Y2/1	緑まりやや弱い/粘性強い	砂少量、黒褐色粘土ブロック少量を含む
4 増オリーブ灰褐色土	2.5GY4/1	緑まりやや弱い/粘性強い	鈍化鉄少量、碧青灰褐色土ブロック少量を含む
5 錆灰色砂	10GY5/1	緑まりやや弱い/粘性質強	鈍化鉄少量を含む
6 黑褐色土	2.5Y3/1	緑まりやや弱い/粘性強い	碧青灰褐色土ブロック少量、砂利少量、砂少量を含む
7 黑褐色土	2.5Y3/1	緑まりやや弱い/粘性強い	碧青灰褐色土ブロック少量、砂少量を含む
8 稲青灰褐色土	5BG4/1	緑まりやや弱い/粘性強い	砂利少量を含む
9 黑褐色土	2.5GY4/1	緑まりやや弱い/粘性質強	黑褐色粘土ブロック多量を含む
10 稲オリーブ灰褐色土	2.5GY4/1	緑まり弱い/粘性強い	鈍化鉄中量、砂少量、砂粒少量を含む

※ 2～5層は SA01 を構成する土層。1・6～8・10層は SD02 の土層。9層は SD02 の立ち上がる土層。

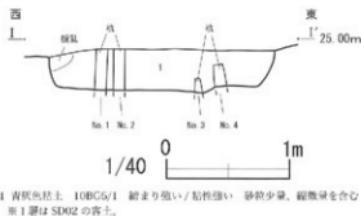
第16図 B区トレンチ②西壁断面図



第17図 B区トレント③西壁断面図



第18図 B区トレント④西壁断面図



第19図 B区杭No.1～4断面図

SA02 の規模は北側壁面（西側）（D 断面）とトレント②西側壁面（F 断面）より、高さが約 1.20 m 以上、幅は約 3.70 m あったと考えられる。そして、SD02 は幅が約 4.60 m 以上、深さは堀底を検出していないため不明である。

また、この調査区西側のからは 11 本の木杭が検出されている。平面的に見ても直線的な並び方となっており、基本的には 2 本 1 組のまとまりを見る。杭の先端は調査対象面より約 1.5 m まで位置する。埋設時の掘り方は確認できないため、この木杭は打ち込まれたものと考えられる。

検出当初は SD02 の内部に直線的な並びで配置されているため、「木橋」の可能性を考えられた。もしこれらの杭列を「木橋」とするならば、対となる杭列が東または西に発見されないと断定できない。しかし、対となる杭列は検出されなかった。よって、杭列は木橋でなく「上留め板を固定する杭」である可能性が高い。土留めの杭と仮定すると、杭は土壁と平行に打ち

込まれており、上墨の修繕を目的にしたものと考えられる。また、杭は近代建築の材でなく、秋田氏・松平氏の時代に上墨が修繕されたと仮定して、近世以降の建築部材であると考えられる。

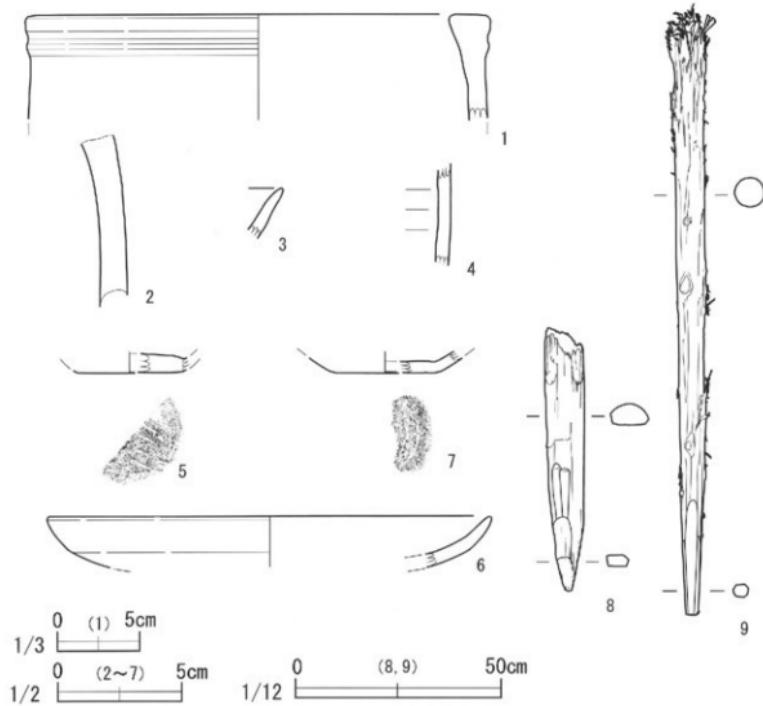
#### 出土遺物状況（第 20-1～9 図、写真図版 5-10～16、19・20 図）

B 区では 29 点の遺物が出土し、本調査での出土遺物の 22% を占める。このうち、9 点を掲載する。

1 は 16～17 世紀の火鉢の破片である。2 は常滑焼の大壺となる破片資料である。3・4 はともに瀬戸・美濃焼であり、器種は 3 が碗、4 が瓶である。

5～7 は土師質土器のカワラケである。5 は中世、6 は 15 世紀中頃より以前、7 は近世と製作時期が考えられる。

8・9 は杭列周辺より出土した建築部材である。8 の木杭は正確な検出位置が不明のものである。成形は木材の先端部分を何度も削っており、その加工痕が顕著に残っている。9 の木杭は木杭 No.1 である。樹皮が残っており、成形は木材の先端部を数回にわたって面取りした程度の状態である。



第 20 図 B 区出土遺物

表3 B区出土遺物観察表

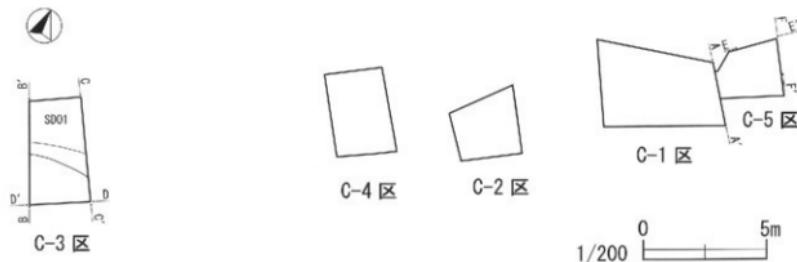
番号	調査区	出土位置	種別	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	土土・船底	色調	焼成	手法・特徴	重量 (g)	備考
1	B区	トレンチ①	土瓶	火鉢	282	64	—	長石・石英	赤褐色	良好	ロクロ成形	(142.6)	16~17世紀
2	B区	調査対象面	疊層	罐	—	—	—	長石	褐灰色	良好	輪投み成形、ハケ調査	(175.6)	常滑燒
3	B区	調査対象面	疊層	罐	—	—	—	灰鉛	オフホワイト	良好	ロクロ成形	(4.8)	波戸・美濃
4	B区	調査対象面	疊層	瓶	—	—	—	鉛釉	外面:暗褐色 内面:灰褐色	良好	ロクロ成形	(18.6)	板戸・美濃
5	B区	調査対象面	土師質土器	カワラケ	—	42	<40>	石英・長石・雲母	黄褐色	普通	表面板木痕	(8.1)	中世
6	B区	調査対象面	土師質土器	カワラケ	378	21	—	長石	に赤い黄褐色	良好	津口ロクロ成形、口縁が被熱	(11.6)	15世紀前半
7	B区	調査対象面	土師質土器	カワラケ	66	40	—	石英・長石	黄褐色	普通	ロクロ成形、裏面赤褐色	(6.6)	近世

番号	調査区	出土位置	種別	断面	長さ (cm)	幅 (cm)	特徴	備考
8	B区	SD02	木製品	建築部材	46.2	4.5	加工痕、被熱	
9	B区	SD02	木製品	建築部材	148	7.6	加工痕、虫食い痕	杭No.1

### 第3節 調査区 C区

C区は大量の廃棄物と湧水を原因として壁面の崩落が著しく発生した。可能な限りの発掘調査を実施するため、トレンチを5ヶ所設置して記録保存に努めた。この5ヶ所のトレンチのうち、C-1区、C-3区およびC-4区より調査成果が得られる。また、後日追加したC-5区の調査成果は、第4節で述べる。



第21図 C区平面図

C-1区では、北側に隣接するSA01に対するSD01が東側壁面より確認できた。惜しくも土塁から堀へと至る傾斜面の部分は土壤が緩く、壁面より大量の流水があって綿密な調査を断念せざるを得なかった。しかし、深度約1.6mより堀底部からSA01への立ち上がりを確認した。地表面から約1.20~1.70mはタイル・コンクリート塊・大量の注射針などの廃棄物による搅乱を受けている。1層からは笠間焼の破片が出土し、2層はSA01へ向かって立ち上がっていく様相が観察された。

C-3区では、SA01に対応するSD01の対岸の立ち上りを確認する。この事より、堀の形状・

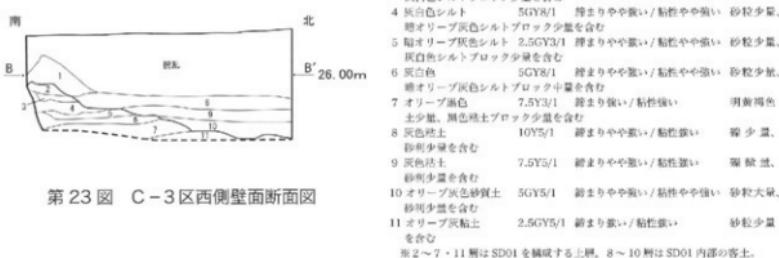
堀の規模を把握する事ができた。堀の底面は地表面から約1.70～1.80mに位置し、底面には縦まりの非常に強い粘土が括がっている。そして、堀の端部は異なるシルトや粘土を高さ10～20cmで、版築状に盛って築造している様子がうかがえる。堀の立ち上がりは底面から、21°で上がり、段差をつけて45°の傾斜角度で立ち上がる。堀の断面形状は丸みを帯びている事から「毛抜堀」である可能性が考えられる。堀内部の土層状況は、最下層より順に多量の砂粒を含む層、砂粒の少ない層、粘質土層が各20～25cmほどの厚さで堆積している。そして、上面には様々な廃棄物が投棄されている。土層堆積状況からこの調査区では、堀の内部に流水があり、堀底に細かな砂粒子が堆積したと考えられる。また、粘土については近隣住民の話や町史より水田の土が流入したと推察する。

C-4区ではC-3区で確認できた堀の対岸と考えられる版築状土層は検出されなく、堀の立ち上がりは確認されなかった。よって、C区の範囲内は全て堀の内部であると考えられる。

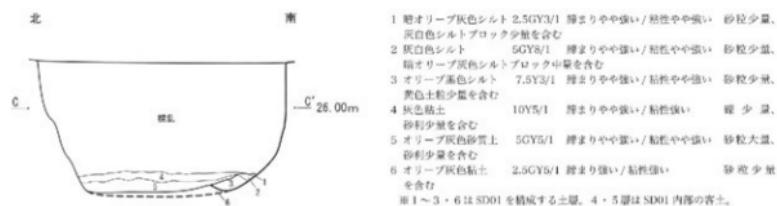
したがって、検出されたSD01の端部とSA01の現位置の関係により、堀幅は13.80～15.20mと推測される。



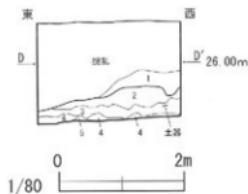
第22図 C-1区東側壁面断面図



第23図 C-3区西側壁面断面図



第24図 C-3区東側壁面断面図



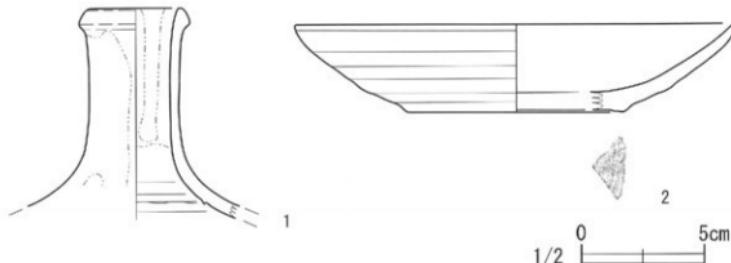
第 25 図 C-3 区南側壁面断面図

### 出土遺物状況（第 25-1～2 図、写真図版 5-17・18 図）

C 区では 5 点の遺物が出土し、本調査での出土遺物の 4 % を占める。このうち、2 点を掲載する。

1 は、笠間焼の糠白釉青流掛徳利であり、製作時期は 19 世紀以降と考えられる。施釉は内面に鉄釉を施し、外面に糠白釉をかけた後に緑釉が施される。

2 は、C-3 区南側壁面の版築上層の 3 層内より出土したカワラケで、製作時期は 16～17 世紀と考えられる。遺物をとおしてこのカワラケのみが SD01 遺構に伴って出土されており、築城時期に関連する遺物であると言える。



第 26 図 C 区出土遺物

表 4 C 区出土遺物観察表

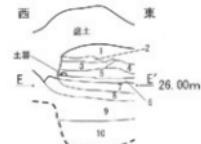
番号	開発区	出土位置	種類	基積	口径 (mm)	深高 (mm)	式様	底土・抹面	外縁	板成	手法・寸法	重量 (g)	備考
1	C-1区	測量対象面	陶器	徳利	36	(81)	—	糠白釉・緑釉	外面：糠白色・純白色 内面：灰白色	良好	口クロ成形	(66.9)	笠間焼
2	C-3区	南壁	土師質土器	カワラケ	(170)	36	<88>	石英・長石・云母	に若い黄褐色	良好	口クロ成形	(40.9)	16～17世紀

#### 第4節 現存する土壘 (C-5区、SAO1)

現存する本丸の土壘 (SAO1) に関する測量調査および、道路改良工事時に隣接する土壘の断面観察を行なった。土壘の等高線は 25 cm 間隔で測量を実施した (第4図参照)。また、断面観察の行なった地点は C-5区と名称付け、C区発掘調査の継続地点名を付した。

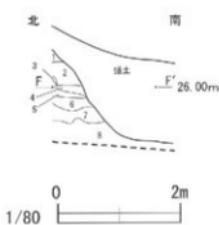
SAO1 の残存状況の良い場所は南北方向に長さ 32.20 m、幅 2.20 ~ 6.20 m を測る。土壘の東西方向は削平されており、現状で民家の庭を、宍戸小学校設立の際に削り取られたと伝えられている。土壘は 2段階の高低差を成している様子が現状で確認される。その 1段目は地表面より約 2.10 m、1段目から土壘の最頂部までは、約 1.60 m の高さを上ると上面は平坦面となっている。したがって、地表面から現状で土壘の残存する高さは約 3.7 m (東側斜面で約 4.0 m) を測る。

C-5区で断面観察を行なった結果、土壘から堀底へと至る傾斜角度は 54°を測る。堀底から上壘の最頂部まで 4.4 m を測り、堀底は南方向に位置する道路の方向へのびるため対岸の確認はできなかった。堀底は C-3区の底面と同様に締まりが非常に強い黒色粘土が確認された。その上面に位置する版築上層の厚さは 1層が 12 ~ 14cm の厚さで盛土しており、これまで確認してきた土壘の土層断面とは SAO1 の版築上層の様相は異なる。土層は黒褐色土とぶい黄褐色土で盛土している。



第27図 C-5区北側壁面断面図

1 植生褐色土 茎を含む	7.5YR2/3 締まり弱い / 粘性普通	明黄褐色土粒少
2 黑褐色土 茎、砂利微量を含む	7.5YR3/2 締まり普通 / 粘性やや強い	明黄褐色土粒中
3 細褐色土 茎、砂利微量を含む	10YR3/4 締まり普通 / 粘性やや強い	明黄褐色土粒少
4 ぶい黄褐色土 茎、砂利微量を含む	10YR4/3 締まりやや強い / 粘性やや強い	明黄褐色土粒多
5 黑褐色土 茎、明黄褐色土ブロック少量、炭化物微量を含む	10YR2/3 締まりやや強い / 粘性やや強い	明黄褐色土粒少
6 ぶい黄褐色土 茎、砂利微量を含む	10YR4/3 締まりやや強い / 粘性やや強い	明黄褐色土ブロ
7 黑褐色土 茎を含む	10YR3/1 締まりやや強い / 粘性やや強い	明黄褐色土粒少
8 黑褐色土 茎を含む	10YR5/6 締まりやや強い / 粘性やや堅い	明黄褐色土粒多
9 黑褐色土 砂利微量を含む	10YR2/2 締まりやや強い / 粘性やや強い	明黄褐色土ブロ
10 黒色粘土 茎 1 ~ 10 層は SAO1 を構成する上層	10YR1/7 締まり強い / 粘性強い 砂利微量を含む	



第28図 C-5区東側壁面断面図

1 植生褐色土 茎を含む	7.5YR2/3 締まり弱い / 粘性普通	明黄褐色土粒少
2 ぶい黄褐色土 茎、砂利微量を含む	10YR4/3 締まりやや強い / 粘性やや強い	明黄褐色土粒多
3 黑褐色土 茎、明黄褐色土ブロック少量、炭化物微量を含む	10YR2/3 締まりやや強い / 粘性やや強い	明黄褐色土粒少
4 ぶい黄褐色土 茎、砂利微量を含む	10YR4/3 締まりやや強い / 粘性やや強い	明黄褐色土ブロ
5 黑褐色土 茎を含む	10YR3/1 締まりやや強い / 粘性やや強い	明黄褐色土粒少
6 黄褐色土 茎を含む	10YR5/6 締まりやや強い / 粘性やや堅い	明黄褐色土粒多
7 黑褐色土 砂利微量を含む	10YR2/2 締まり強い / 粘性強い	明黄褐色土ブロ
8 黒色粘土 茎 1 ~ 8 層は SAO1 を構成する上層	10YR1/7 締まり強い / 粘性強い 砂利微量を含む	

## 第5章 総括

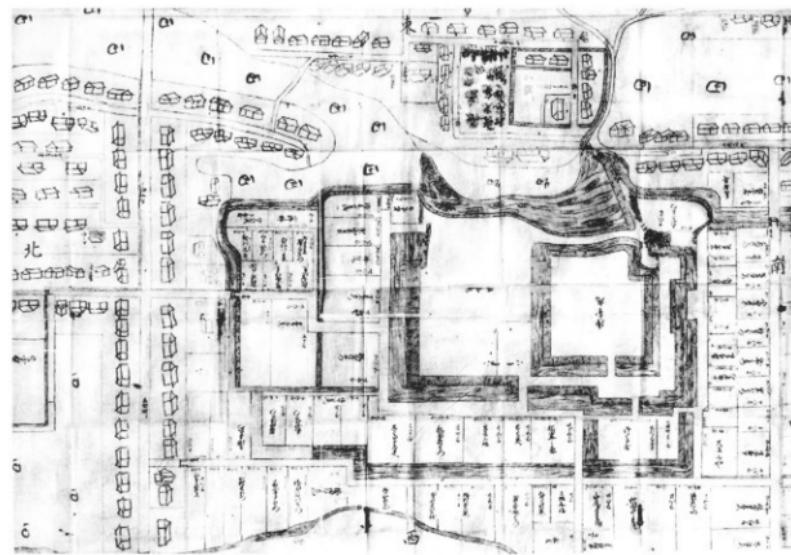
前章まで記したように、今回の調査では、2本の土塁とそれに伴う堀跡が各1条検出された。少ない調査面積の中ではあったが、一定の成果を上げる事ができた。ここでは今回の調査で検出された遺構・遺物について概観し、まとめとしたい。

調査区A・B区では、その双方にまたがって二の土塁(SA02)が位置しており、それに沿って南側に堀をめぐらせている様子が確認できた。この土塁の構造は地盤強化の目的で締まりの強い粘土で整地し、その上面に粒子密度の異なる土壤を版築状に盛っていく構築方法を用いている。また、B区からは上塁に沿って1列に並んだ杭列が検出された。この杭列は一箇所につき、あたかも2~3本ずつ意図的に束ねたかのような位置関係で出土しており、土塁の構築、あるいは修繕を行なう際、土留め工事のために打ち込まれた木杭である可能性が考えられる。この工法は、現在でも最も簡易的な土留め支保工として使われており、その歴史を考える上で貴重な資料であるといえる。宍戸の地では中世以後、宍戸氏・佐竹氏・秋田氏・松平氏と度重なる支配者の交代をみており、現地調査の結果から、そのいずれかの時点で城の修繕工事が成されている可能性が指摘される。

調査区C区では、ほぼ全ての区画から本丸の土塁(SA01)に伴う堀跡(SD01)が検出された。C-3区からは堀の端部が一部検出している。シルトのみで構築した理由として、締まり・粘性が共に強い土で構築する事により、堀の形状を保ち埋没を防ぐ役割を持たせるためと考えられる。そして、C-5区からはSA01からSD01へと傾斜する一連の様相が認められた。その様相はC-3区の基底部に見られる粘土をC-5区からも確認でき、その上面に版築土層を構築してSA01を築いている。また、本丸の土塁(SA01)と二の土塁(SA02)で構築している盛土の様相には差異を見る。この事により、本丸の土塁と二の土塁は構築された時期に差が生じている、あるいは本丸の土塁が丁寧に盛土された可能性が考えられる。

出土遺物は、主に中世～幕末にかけての資料が出土しているが、近世初頭に位置する遺物の出土が少ない傾向が見受けられた。これは秋田氏の国替えによって宍戸城が廃城となった際に、当該地において陶磁器類を使用する身分の者が少なくなり、廃棄される遺物も少なくなった結果であると考えられる。また、黒道具や笠間焼の破片が出土しており、本調査区周辺に窯が造られていた可能性が考えられる。

以上、今回の調査で検出した遺構と遺物について記した。本調査区内で検出された堀跡の基底部の自然堆積層からはシルト質土がほとんど見られない事から、宍戸城の土塁はタタキ土層ではなく、自然の湿地に他所からシルトや粘土を運び込み、それを高く版築状に盛る事で築城していたと考えられる。これは堀の壁面についても同様の構造が確認でき、土塁と成した盛土の間に位置する自然の湿地を堀として流用していた可能性がある。しかし、『宍戸城下絵図』には堀に水を湛えた様子が描かれており、現地調査での流水量からは想像できない。この事の解明については、宍戸城全体の調査に関する今後の課題であり、周辺調査による資料の蓄積が望まれる。



第29図 穴戸城下絵図

表5 出土遺物集計表

出土位置	陶器					磁器			鋳器			土器					石器		瓦		木製品		計	
	壺体	瓶	甕	香炉	皿	不明	瓶	甕	貝	鑄道具	不明	火鉢	桶体	皿	土器類	縞文 土器	不明	打斧	平瓦	丸瓦	建築 部材			
A-E	壺十一 枚	6	1	4					7	1						2								21
B-E	漢式対象形 一組	2	4	1		1		1	1	1	3	15	4	1	7	1	2						76	
B-E	漢式対象形 一組		1		1		1						8	2									2	15
D-E	トレンチ①	1	2			2	1		1									4	1					12
D-E	トレンチ②					1																		1
B-E	トレンチ③													1										1
C-H-E	漢式対象形 五		1				1						1											3
C-H-E	両壓												1											1
C-G-E	七壓												1											1
計		25					7			9			78					1		7		2		129

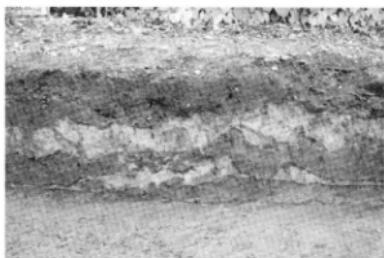
## 引用・参考文献

- (財) 茨城県教育財団 2006『新普光寺・宍戸城跡 主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第256集
- 山武考古学研究所 2006『宍戸城跡 - 店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
- (有) 毛野考古学研究所 2009『宍戸城跡 - 市道(友)2026号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
- 友部町商工会 1971『友部町百年史』
- 益子町史編さん委員会 1989『益子町史 第5巻 燥業編』
- 友部町史編さん委員会 1990『友部町史』
- 茨城県教育委員会 2000『茨城県遺跡地図(地図編)』
- 友部町教育委員会 1978『友部町・涸沼川ほとりの文化 -』
- 大関 武 2002「茨城県における中世常滑系陶器の一様相-常陸国「宍戸庄」域を中心に-」『日々の考古学・東海大学考古学教室開設20周年記念論文集-』東海大学考古学教室開設20周年記念論文集委員会
- 大関 武 2003「茨城県における中世瓦の一様相-常陸国「宍戸庄」域を中心に-」『領域の研究・阿久津久先生還暦記念論集-』阿久津久先生還暦記念事業実行委員会
- 吹野 富美夫 2006「笠間焼研究の課題と展望」『考古学の諸相II・坂詰秀一先生古稀記念論文集・』坂詰秀一先生古稀記念会
- 稻田義弘 2007「宍戸城跡出土の近世陶磁器」『菟玖波・川井正一・斎藤弘道・佐藤正好先生還暦記念論集-』菟玖波の会
- 山原康司 2007「笠間系陶器の磁器設定Ⅱ」『考古学の深層・瓦吹堅先生還暦記念論文集-』瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会
- 渡辺芳郎 2009「平佐・苗代川・日本山 - 考古学資料から見た近世薩摩焼の技術交流(予察) -」『金大考古 第63号』
- 井上宗和 1973『ものと人間の文化史9 城』法政大学出版局
- 阿久津久他 1979『日本城郭体系 第4巻 茨城・栃木・群馬』新人物往来社
- 西ヶ谷恭弘 1988『日本史小百科 城郭』東京堂出版
- 茨城城郭研究会 2006『図説 茨城の城郭』
- 茨城県立歴史館 1997『笠間焼二百年のあゆみ』

写真図版 1



A区 全景（東から）



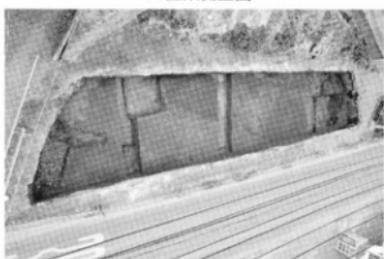
A区北側壁面



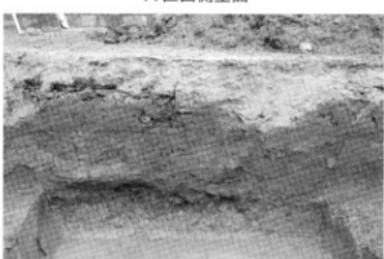
A区東側壁面



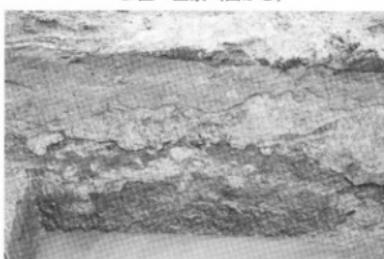
A区西側壁面



B区 全景（西から）



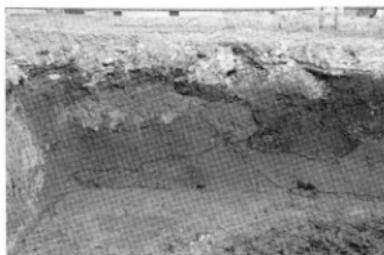
B区北側壁面（西側）



B区北側壁面（東側）



B区東側壁面



B区南側壁面



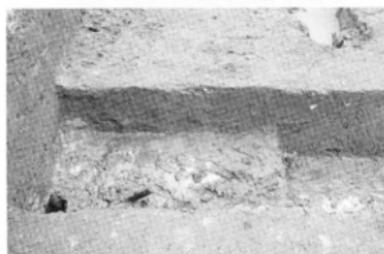
B区西側壁面



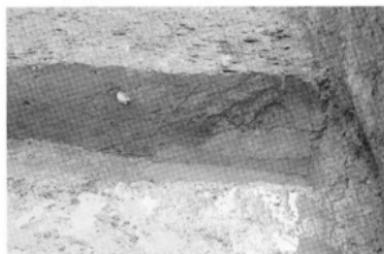
B区トレンチ①縦検出状況（西から）



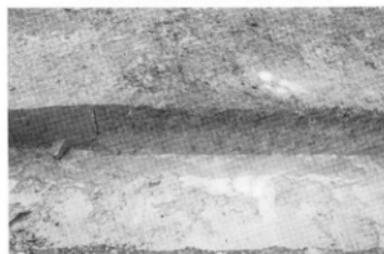
B区木杭No.1～4検出状況（南から）



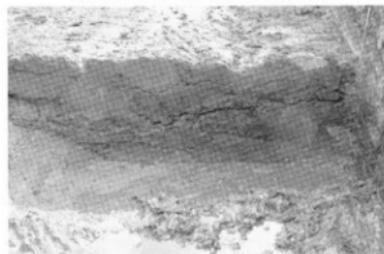
B区トレンチ②西側壁面（南部）



B区トレンチ②西側壁面（北部）

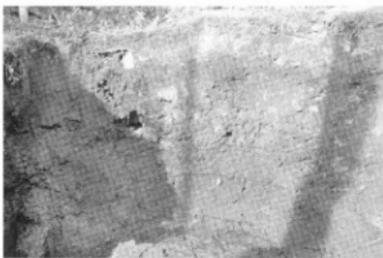


B区トレンチ③西側壁面（中央部）

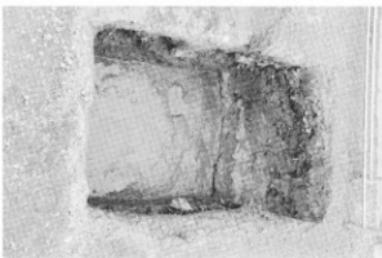


B区トレンチ④西側壁面（北部）

写真図版 3



C-1区東側壁面



C-3区 全景（西から）



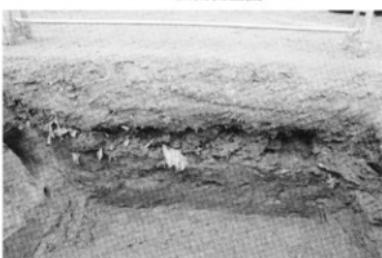
C-3区東側壁面



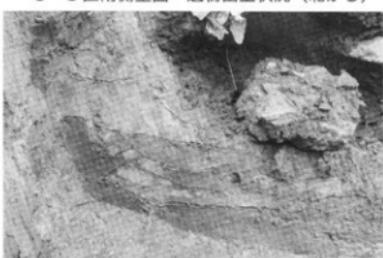
C-3区南側壁面



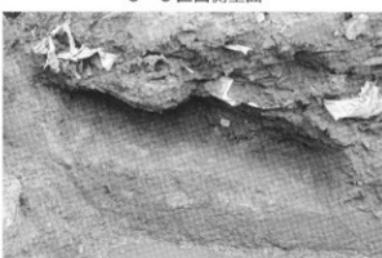
C-3区南側壁面 遺物出土状況（北から）



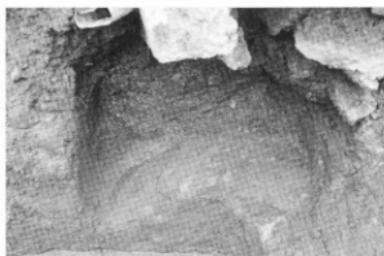
C-3区西側壁面



C-3区西側壁面（南側深掘り）



C-3区堀底プラン確認（西側壁面）



C-3 区堀底プラン確認（東側壁面）



C-5 区北側壁面



C-5 区東側壁面



土壠 遠景（西から）



土壠 現状風景 1（南から）



土壠 現状風景 2（北から）

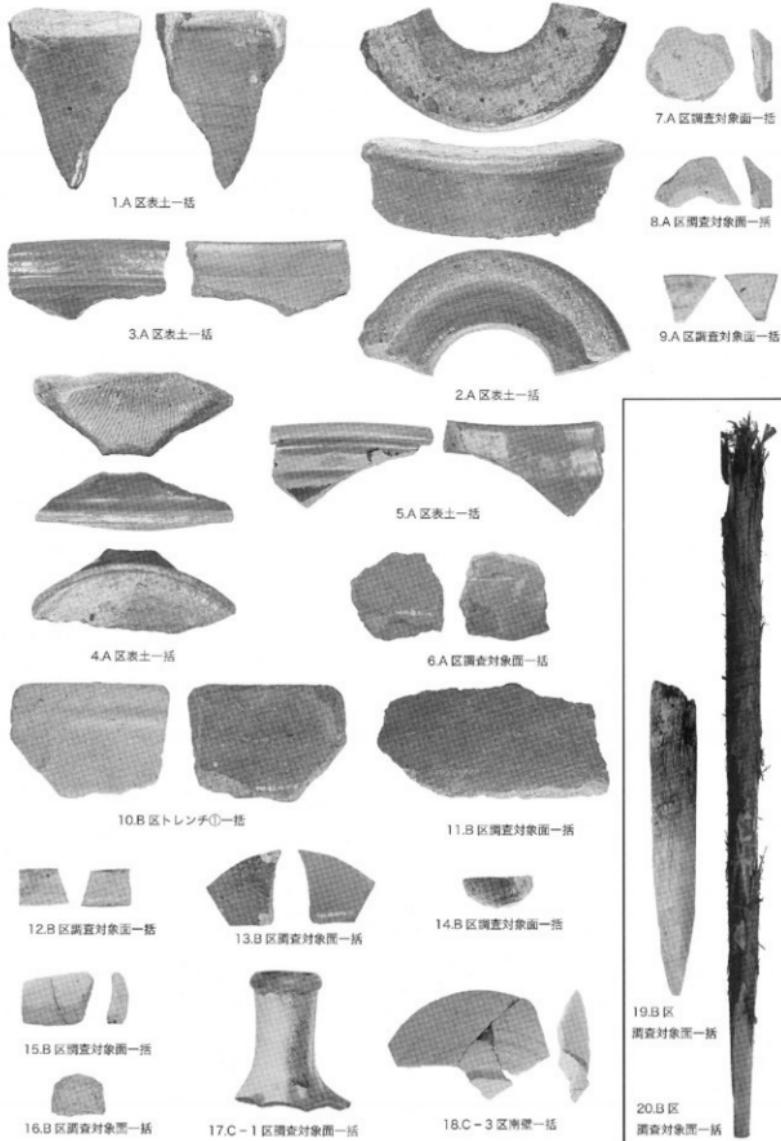


土壠 現状風景 3（西から）



土壠 現状風景 4（北から）

写真図版 5



宍戸城跡出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	ししどじょうあと					
書名	宍戸城跡					
圖書名	市道(友)1級13号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次						
シリーズ名	笠間市文化財調査報告書					
シリーズ番号						
編著者名	森本 崇 大角謙一					
編集機関	トイケイトレード株式会社					
住所地	〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町1-1-16 テイケイトレード新宿ビル8F TEL 03-5155-0391					
発行年月日	2009年10月15日					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯 東 経	調査期間	調査面積	調査原因
ししどじょうあと 宍戸城跡	いほらさきんかさまし 茨城県笠間市 たいらまち 137 ほか 平町 137 外	市町村 08216	遺跡番号 321042	36°20'29" 140°20'22"	2009.06.29 2009.07.27 2009.09.02 2009.09.10	340 m <sup>2</sup> 市道(友)1級 13号線道路改 良工事に伴う 埋蔵文化財発 掘調査報告書
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
宍戸城跡	城館	中世～近世	土壘 2 本 堀跡 2 条	桔梗台 瀬戸・美濃(碗・瓶) 笠間(擂鉢・甕・篠利) 常滑(甕) 上野質土器(皿) 木製品(建築部材)	正保年間作成された「宍戸城下絵図」に見られる位置より上堀および堀跡を検出す。	
要約	今回の調査は、現存する本丸の土壘を測量し、発掘調査により本丸の堀跡、二の土壘および堀跡を検出す。本丸の土壘は基底部に継まりの非常に強い粘土がみられ、その上面に版築手法を用いてにびい黄褐色土層と黒色土層を盛土する。また、二の土壘の構造は基底部に継まりの非常に強い粘土を盛土し、その上面に版築手法を用いて砂質土層や黒色粘土層を盛土する。本丸と二の堀では盛土する土層に異なりが見られる。堀跡は掘つて構築したものではなく、土壘と同様で版築状に盛土をしている。また、堀の内部に打ち込まれた杭列が検出され、この杭列は土壘の修繕を行なう際に土留め板を固定する目的で用いたものと考えられる。遺物は少量ながらも中世のカワラケ、近世以降の等間焼および窯追具(桔梗台)が出土する。					

茨城県笠間市

## 六戸城跡

市道(女)1号線過疎改良工事に伴う歴史・文化財発掘調査報告書

2009年10月16日

編集 テイケイトレード株式会社  
東京都新宿区歌舞伎町1-1-16  
テイケイトレード新宿ビル8F  
TEL 03-5155-0391

発行 等間市教育委員会  
茨城県笠間市石井717番地  
TEL 0296-77-1101

印刷 テイケイトレード株式会社  
能登印刷株式会社  
石川県金沢市武蔵町7-10  
TEL 076-233-2550

